よもぎばあさんの

妖怪茶漬け

2

作 そのやま かりん　絵 さこやん

ほい、よもぎばあさんじゃよ。
また、妖怪話を　聞きに来たのかい？
それじゃあ　さっそく、
お茶漬けでも　ごちそうしようかの。
ろくろ首味、海坊主味、
とびっきりのを　用意してあるから、
たっぷりと　味わえるぞ。
では、始めようかの。
食べながら、耳をかたむけておくれ。
ほっほっほっ。

三杯目●知らぬがほっとけ！

ろくろ首（ろくろくび）

これはな、江戸時代の　ある若い夫婦の話じゃ。ふたりは　近所でも
ひょうばんの　仲のいい夫婦でのう。それまでは　とても幸せに
暮らしとったんじゃが…、事の起こりは　ある朝から始まったんじゃ。
嫁が朝めしの　したくをしようと、夫より一足先に目をさました時にの、
ふと、天井の板の一枚が　ずれておるのに　気付いたんじゃ。
どろぼうに　入られたんじゃなかろうかと　不安に思うて、すぐに夫を
起こしたんじゃが、夫が　家の　すみずみまで　しらべてみても、
べつに　とられたもんは　何もありゃせん。
「はて…、ふしぎなことが　あるものじゃ」
そういうて　首を　かしげながら天井板を　元にもどした　夫じゃったが、

「たぶん、大きなネズミの　せいじゃろう」
と思うて、たいして　気には　しなかったんじゃよ。
　ところがじゃ。
次の朝も、その次の朝も、元に　もどしたはずの天井板が、やっぱり同じように
ずれておってのう。何やら　胸さわぎが　するというて、嫁が　たいそう
不安がるものじゃから、三日目の夜にの、夫は　寝ずの番…つまり、一晩中
起きておって　見はりをすることなんじゃが…　その寝ずの番をして、
原因を確かめることに　したんじゃ。
　そうして夜がふけ、やがて　不安がっておった嫁が　寝静まった頃のことじゃ。
夫は嫁の横にすわって、目をこらして　天井を　ずっと見張っておったんじゃが、
突然、けむりのような、霧のような、なんだかもこもこしたもんが
部屋の中に　わき出してきたんじゃ。
　天井板を　ずらした　犯人が、いよいよ　あらわれたと思うて、
夫は　棒きれを　手にとって身がまえたんじゃが、

よく見ると、けむりのようなもんは、となりで寝ておった嫁の胸元あたりから、ふきだしておったんじゃよ。

おどろいて、目を　まんまるにして　嫁の寝姿を見ていた夫はの、目をこらして、もう一回よく見直したんじゃが、ほんとうに　おどろいたのは、その次の　できごとじゃった。

なんと　嫁の首が、まるで大蛇が巣穴から　はい出るみたいに、じわり　じわりと　伸びはじめたんじゃよ。

もう　夫は　たいそう　おどろいてのう。
恐ろしさのあまり、体が石のように
固まってしもうて、声も　出すことが
できんじゃった。
やがて嫁の首は、頭が天井に　つっかえるまで
のびきると、しばらくの間、ゆらゆらと
不気味に　ゆれておったんじゃが、
体が　ごろりと寝返りをうつと、
のびる時とは　正反対で、首は　ものすごい速さで　ちぢんで、
あっというまに　元の姿に　もどったんじゃよ。
嫁は　何ごともなかったかのように、また静かな寝息を　たてとるもんで、
夫は、これはきっと悪い夢でも　見たのじゃと、
自分に　いいきかせようとしたんじゃが、嫁の頭が　つっかえたところは、
昨日と同じように、板が　ずれておったんじゃ。

ようやく体が動くようになった夫は、嫁を起こさんように　外に飛び出すと、急いで近くの寺に　かけこんで、坊さんに　助けを求めたんじゃ。

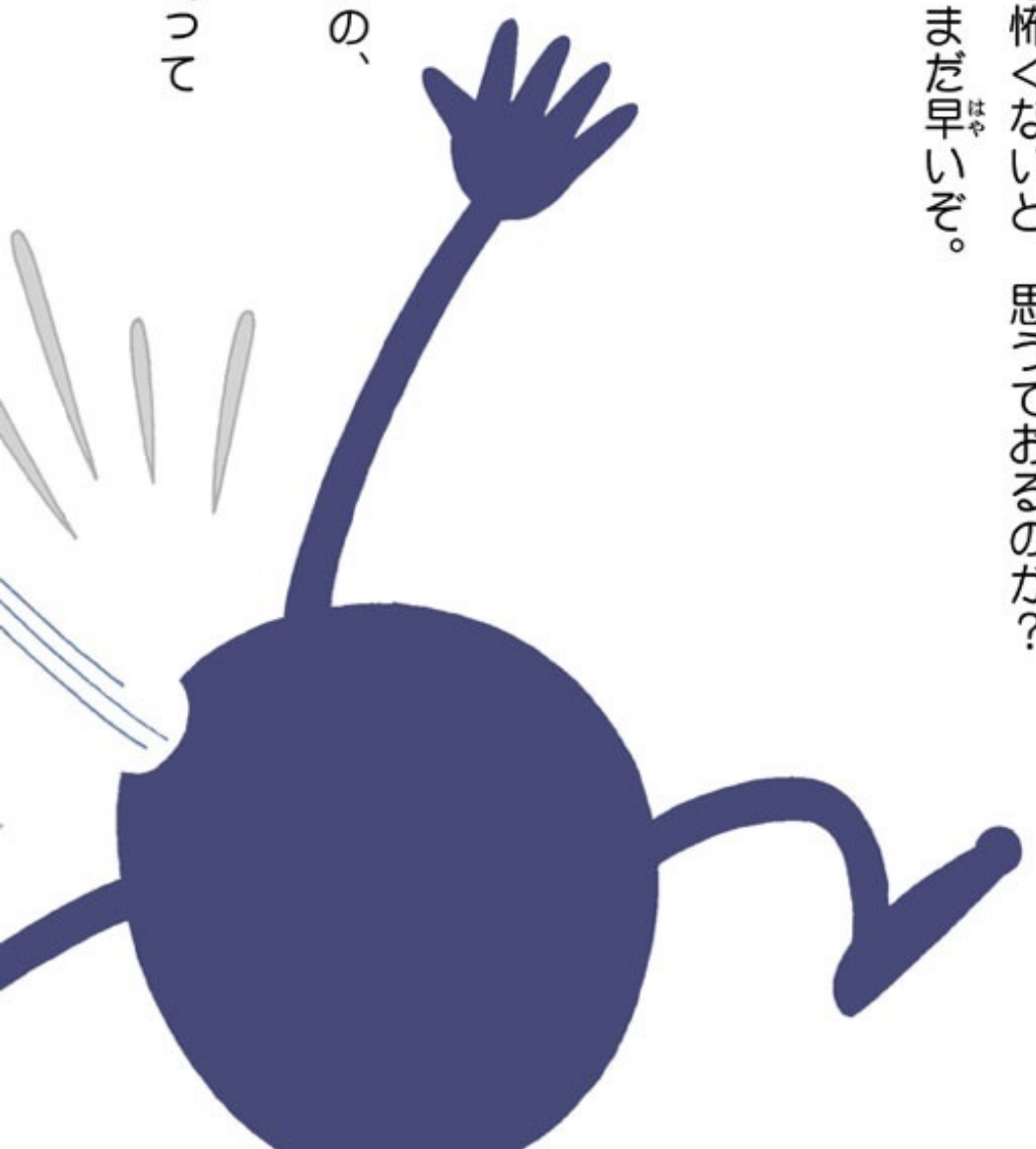
しかしの、ふるえる声で、さっきの出来事を　説明した夫に、坊さんは、おどろいたようすもみせず、静かに　こう言うたんじゃ。

「それはな、ろくろ首というて、寝ている時に首が伸びるほかは、普通の人間と変わりはない。

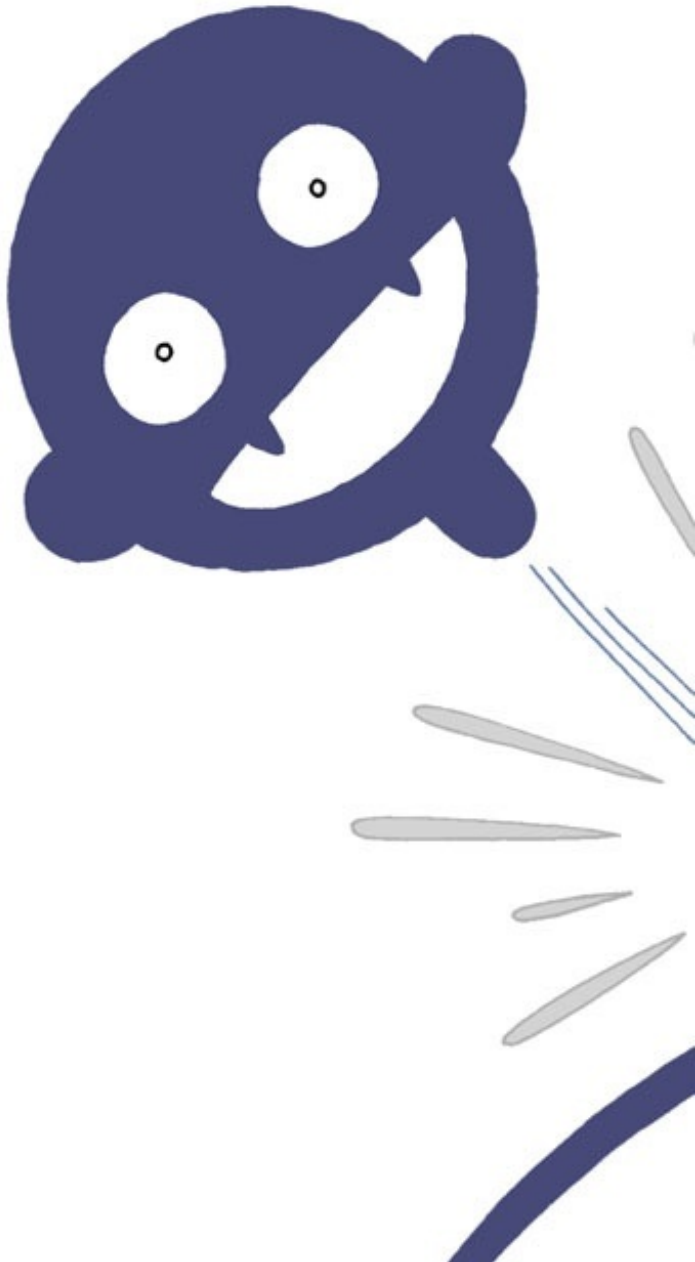
本人は、起きてる時には、何も　おぼえておらんはずじゃ。だがな、そのことを口にしないほうが　おぬしのためじゃぞ。おぬしさえ　黙っとけば、今までどおり　幸せに暮らせるのじゃから。気にしないようになるまで、しんぼうすることじゃ」

夫は　ずいぶん悩んだ末に、結局何も　見なかったことにしたんじゃよ。このように　ろくろ首はの、起きとる時は普通の人間での、寝とる時に首が伸びるんじゃが、人間の時も、ろくろ首になっとる時も、自分が　ろくろ首だということに、まったく　気がついておらんのじゃ。

ろくろ首は　人間には　危害を加えるようなことは　しないのじゃが、
蛇嫌いの人間が、この妖怪を見たら、きっと生きた心地が　せんじゃろうのう…。
まったく　ろくろ首というのは　おかしな妖怪じゃ。
ん？…、そんな妖怪は、ちっとも怖くないと　思うておるのか？
ほっほっほっほっ、安心するのは　まだ早いぞ。
ろくろ首には、『ぬけ首』とか
『飛頭蛮』というて、
首が体からスッポリぬけて、
頭だけで　空中を
飛びまわる種類のものが
おるんじゃが、こいつらは、
首がのびる　ろくろ首とは　大違いの、
とても恐ろしい妖怪なんじゃよ。
たいていは　四、五匹で群れをつくって



人里はなれた山の中に
ひそんでおっての、
旅人が　迷いこんでくるのを
待っておるんじゃ。
それでの、
めあての旅人を見つけると、
ぬけ首たちは　いかにも
やさしい人間のふりをして、うまいぐあいにウソをついての、
自分たちが　すみかに　しとる山小屋に、旅人を招き入れるんじゃよ。
　ぬけ首たちも、ふだんは　ふつうの人間の姿をしとるし、旅人は、まさか
そこが化け物のすみかじゃとは　夢にも思わん。おまけに、たいそうな
もてなしを受けるものじゃから、すっかり安心しきって、
山小屋に一晩泊めてもらうことに　なるわけじゃ。
　しかしの、ぬけ首たちの　ほんとうのねらいは、旅人を食うことなんじゃよ。



旅人をもっと安心させるために、
ぬけ首たちは　わざと先に眠ったふりを
するんじゃ。やがて　旅人が　つられて
眠り始めたとたん、ぬけ首たちの首が、
体からスッポリぬけての、
耳を　つばさみたいに動かして　空中を
飛びまわったかと思うたら、くるりと向きをかえて、
いっせいに　旅人の体に　食らいつくのじゃ。
いつもは、虫や野ネズミなんかを
食うて　おるもんじゃから、久しぶりの人間の肉は、
ぬけ首には　たいそうな　ごちそうなんじゃよ。
ろくろ首の　なかまにはちがいないが、ろくろ首と
決定的にちがうのは、人を食う恐ろしい妖怪じゃということと、
人間の姿でおるときも、自分たちが

ぬけ首ということを　わかっておるということなんじゃ。
　おぬしも　もし、山の中で　やさしそうな人間に出会うたら、じゅうぶん
気をつけたほうがいいぞ！　その人間が本当の人間か、それとも、
ぬけ首が人間のふりをしておるのかは、
おぬしが　眠り込んで　しまわないかぎり、
分かりは　せんのじゃからのう。
　ほう、おぬし、山の中に　入らぬから　だいじょうぶ…
と、安心しとるのか？　それは　ちょっと早いぞ。
　ぬけ首たちは、ときどき
山から降りてくることが　あるのじゃ。
　真夜中に、ブーン…ブーン…と、
虫の　羽ばたくような音が　聞こえてきたら、
それはきっと、腹をすかせた　ぬけ首たちが、
飛びまわっとる音に　まちがいないのじゃから。ほっほっほっほっ。

四杯目●波の裏からヌーッ

海坊主（うみぼうず）

船乗りたちに、一番恐れられている妖怪が、海坊主じゃ。
こいつはの、世界中　どこの海にも現れる妖怪での、多くの船乗りたちが、
航海の途中に　とても恐ろしい目に　あっておるんじゃ。
　海坊主が現れる時は、それまで静かじゃった海が、
突然、台風の時のように　大荒れになっての、嵐に巻き込まれた船が、
波にのまれぬように　必死でカジをとっておると、
大きな海坊主が　目玉だけを光らせて、
波の間から　ヌーッと現れるんじゃ。そしての、その船が
何百人も乗れるくらいの　大きな船でも、
あっというまに　ひっくりかえしてしまうんじゃ。

さて、わしが知っとる
海坊主の話に、
こんなのがあるんじゃが…、

むかしむかしのことじゃ。
十人ほどの客を乗せた船が、
港から出ようとした時じゃった。

急に天気が悪くなってきたもんで、
船頭が　船を出すのを止めようとしたんじゃ。
そしたら、客の一人じゃった金持ちの商人が、
「急ぎの荷物がある。金はいくらでも出すから、
すぐに船を出してくれ」
　そういうて、倍の運賃を渡したんじゃ。
船頭は少し迷うたが、運賃をはずんで　もろうたし、
波もそれほど荒れては　おらなかったから、他の客にも了解してもろうて
船を出すことにしたんじゃ。
　ところがじゃ、沖に出たとたん、海が荒れ出したかと思うと、
大波の裏から　山のような海坊主が現れて、
「一人だけ海に身を投げろ。そしたら他の者は助けてやる」
というたんじゃ。

海坊主は船先を　しっかりつかんでおるものじゃから、
逃げようにも逃げられん。船頭と客たちは、しかたなく、海に身を投げる者を
くじで決めることにしたんじゃが…、
外れを引いたのは、金持ちの商人じゃったんじゃ。
慌てた商人は、側にいた赤ん坊を抱いた夫婦に向かっての、
「そ、その赤子を私にくれ！　金はいくらでも出す！」
と、ふところから小判の束を取り出したんじゃ。赤ん坊をお金で買って、
自分の代わりに、海に投げ捨てようと考えたんじゃよ。
大事な我が子じゃから、嫁のほうは　もちろん固く断った。ところがじゃ、
その夫というのが、実は、お金をかける遊びで負けて、借金を作っておってな、
借金取りから逃げて、船に乗り込んでおったんじゃよ。
「もっと金を出したら、この子はくれてやる！」
お金に目が　くらんだ夫は、そういうて、嫌がる嫁から
赤ん坊を無理矢理取り上げたんじゃ。

商人は、もうお金は無かったもんじゃから、
「荷物を届けたら大金が入る。
その一部をお前にやる」
　というたんじゃが、
夫はもっとよこせと、
首を　たてにふらなかった。

商人と夫が言い合っている　わずかな　すきをついて、
嫁は　なんとか　我が子を取り返して、船の奥へ逃げたんじゃ。
そしての、夫がすぐに追いかけようとした時じゃ。
突然船が大きく傾いて、商人の積み荷が　すべり出して、
海に落ちそうになったんじゃ。
商人は　大慌てで　荷物を止めようとする。
持っとった小判が　手からこぼれても、荷物のほうが大事じゃったんじゃろ。
夫のほうはというと、散らばった小判の音で　振り返り、
それを必死に　ひろおうとする。すると船がもっと傾いての、
はずみで、儲けばかり気にしておった商人と、目先のお金に夢中になっとった夫は、
荷物もろとも、海へ放り出されてしもうたんじゃよ。
とたんに、海坊主の姿は消え、大荒れだった海は静かになったんじゃ。
その後　商人と夫は、海の中に　沈んだまま、
二度と浮き上がって　こなかったということじゃ。

欲に目がくらんだ人間ほど、心にすき間ができるもんじゃ。
妖怪たちは、そのすき間を　ちゃんと分かって入りこんでくるんじゃ。
おぬしは大丈夫か？　何でも欲張って　独り占めにしとったら、
妖怪がすぐに　やってくるぞっ！

さあ、今回は　ここまでじゃよ。
また　妖怪話を聞きたくなったら、
いつでも　遊びに来ていいぞ。
とびっきりの妖怪茶漬けを
用意して、待っておるからの。
ほっほっほっほっ。